

序——書陵部京都出張の思い出——

西本昌弘

二〇〇三年から二〇一五年までに五輯を刊行した『禁裏・公家文庫研究』が、このたび新たに冊を重ねることになった。本論集の基礎には、田島公氏を研究代表者とする科学研究費補助金による一連の共同研究があるが、宮内庁書陵部や東京大学史料編纂所などに所属する研究者を中心に、東山御文庫や書陵部に所蔵される古典籍の目録を公開するとともに、各所蔵機関の未刊史料を紹介・翻刻し、新史料の持つ意義を世に問うてきた。根気のいる地味な研究ながら、これまで一般の研究者には開かれていなかった情報を数多く公表し、この分野の研究状況を大きく塗り替えてきたことは、衆目の一致するところであろう。本論集には禁裏・公家文庫本に関する地道で質の高い研究成果が掲載されており、毎回拝読して蒙を啓かれてきた。

私は一九九一年四月に宮内庁書陵部編修課に入り、一九九九年三月まで勤務したが、この間、毎年秋の東山御文庫を含む京都出張には三回参加させていただいた。最初の京都出張は一九九三年九月のことで、詫間直樹氏とともに七泊八日の日程で出かけ、初日には京都国立博物館で『稿本北山抄』を調査した。この京都出張は主として『皇室制度

史料』編修に伴うもので、当時準備を進めていた儀制編の誕生・成年式などに関わる史料を採取し、原稿の校訂を行う目的があった。私は関西の出身であったが、東山御文庫の何たるかをまったく知らず、東京に赴任して書陵部の出張ではじめて御文庫の存在とその価値を知った次第で、みずからの不明を深く恥じたものであった。

二回目の京都出張は一九九五年一月のことで、田島公氏とともに東山御文庫で『周易抄』などを調査したが、やはりもともと印象深かったのは、このときはじめて『新撰年中行事』と出会ったことである。『年中行事』上下二冊（勅封一四四―八）は何の変哲もない近世写本であったが、本文を何度も確認すると、これまで知られている年中行事書とは異なるものであるように感じた。そこで本文の一部を書き写し、帰京後に書陵部で詳しく調べた結果、これが藤原行成撰の『新撰年中行事』の伝本であることが判明したのである。

東山御文庫では毎年秋に侍従職を中心に曝涼が行われるが、書陵部の調査はこの曝涼中に実施されるので、天候にもよるが、通常は午後二～三時頃には片付けがはじまる。このため、出来るだけ閲覧時間を

確保するために、昼食抜きで調査を行うことが多かった。調査は手書きで記事を写し取る作業が中心であったから、こうした作業が何日も

続くとさすがに疲労が蓄積した。当時の宿舎は京都御苑内の白雲荘というところで、旧桂宮邸の一角にあった。一〇畳ほどが二間の一間に侍従職の方々、もう一間に書陵部の四名（図書調査室二名・編修課二名）が寝泊まりしたが、大人四人が同部屋の七連泊は身に応えた。また、夜は洛中の飲食店を徘徊したから、出張の最終日ともなると、さすがに疲労は頂点に達し、ボロ雑巾のようになって帰ったことを記憶している。しかし、京都出張で書写してきた興味深い史料を、書陵部において関連史料と照らし合わせながら確認するのは、何にも増して楽しい作業で、その多くは既知の史料であったが、たとえ一字でも流布本を正す手がかりが得られれば、出張の疲れは一気に吹き飛んだ。

その後、退職して関西大学に移ってから、毎春秋になると防虫香の樟脳の臭いが思い出され、院生を連れて書陵部や国立公文書館を訪ねた。また、田島氏の科研調査の関係などで東山御文庫本の拝観を許され、二〇〇一年一月には東山本『日中行事』（勅封一四四―一六）の存在を知ることになった。この写本も普通の近世写本であったが、その後、芳之内圭氏とともに内容調査を進めたところ、撰関期の未知の日中行事書であることが判明した。こうした経験から、東山御文庫本を調査する際には、外題はあくまでも仮のものと考え、本文の内容を慎重に吟味することが大事であると痛感した。本論集第一輯の序で橋本義彦氏が指摘されているように、東山御文庫には今はなき古写本の忠実な近世写本を数多く残しており、近世の新写本といえども軽視することはできない。古写本が存在しない古典籍の場合、東山御文庫

本が最善本であることが多いのは、こうした理由による。

書陵部の京都出張では、東山御文庫本以外に、陽明文庫の近衛家本、京都大学附属図書館の菊亭家本・平松文庫本、清家文庫本、京都大学文学部博物館（総合博物館）の狩野亨吉蒐集文書・勧修寺家文書などを調査するのであるが、これらの蔵書を順次閲覧すると、近世の京都における蔵書の書写過程が期せずして浮かび上がってくる。また、帰京して書陵部の九条本・伏見宮本・鷹司本・三条西本・葉室本・柳原本・壬生本などと対照すると、やはり書陵部本の成立もこれら書写本の輪の中に入っていることが判明する。明治維新後、公家の蔵書の多くは東京に運ばれるなどして、京都を離れることになったが、京都出張で各文庫本を調査した我々は、東京所在の写本と京都所在の写本の両方に触れることで、二、三百年前の京都における禁裏・公家文庫本の書写活動を再確認する作業を行っていることになろう。

『禁裏・公家文庫研究』は、東山御文庫本だけでなく、各地の所蔵機関に分散所蔵される禁裏・公家文庫本を幅広く調査して、目録学的手法によって本来の構成を復原することをめざしている。私などがかつて実感したことを、本論集は深く掘り下げて示してくれており、禁裏・公家文庫間の書写関係はかなり明らかになってきた。何よりも田島氏の努力によって、昨年一〇月より東大史料編纂所の閲覧室で東山御文庫本のデジタル画像の公開が開始された。本年五月からは京都府立京都学・歴史館にて陽明文庫本のデジタル資料閲覧がはじまっている。禁裏・公家文庫本に関する研究は新たな段階に入ったということができ、この機会を捉えて、この分野の研究者の裾野が広がること、そのために本論集が活用されることを祈りたい。

序——書陵部京都出張の思い出——	西本昌弘
------------------	------

第一部

前久が手にした関ヶ原情報	藤井讓治	3
--------------	------	---

尊経閣文庫所蔵「無題号記録」の書写年代について——高野切第三種筆跡との比較より——	恵美千鶴子	19
---	-------	----

宮内庁書陵部所蔵九条家本「諸次第等目録」について——平安時代儀式研究のために——	神戸航介	31
--	------	----

陽明文庫所蔵『勘例』十三函十八号における先例記事の特徴	黒須友里江	47
-----------------------------	-------	----

第二部

大日本古記録未収の『猪隈関白記』原本・古写本	尾上陽介	63
------------------------	------	----

陽明文庫所蔵「藤原師実執筆除目尻付関係史料」三点の紹介	田島 公	89
-----------------------------	------	----

宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』六「御読経」・七「御願供養」	藤原重雄	113
------------------------------------	------	-----

陽明文庫所蔵『長谷寺縁起文』の解題と翻刻——鎌倉長谷寺本との比較検討を中心に——	田島 公	133
--	------	-----

『院中御湯殿上日記』（天正一五年八月～一二月記）の紹介

遠藤珠紀

175

＝第三部＝

宮内庁書陵部所蔵御所本目録（稿）

小倉慈司

(2)

あとがき

執筆者一覧

あとがき——禁裏・公家文庫研究の集大成をめざして——

本書は、二〇二二―一六（平成二四―二八）年度科学研究費・基盤研究（S）『日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——』（研究代表者：田島公、研究課題番号二四二二二〇〇一）で行った研究成果を収録したものである。本助成事業に対しては、独立行政法人日本学術振興会より、五年間で一億九千一四九万円（直接経費：一億四千七三〇万円、間接経費：四千四一九万円）を交付していただいた。研究計画の概要や経緯、その後の進捗状況に関しては、

①日本学術振興会のHP (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-24222001>)

②同HPの科学研究費助成事業（基盤研究（S）公表用資料（平成二七年度研究進捗評価用）：https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-24222001/24222001_kenkyu_shinchoku_hyoka_gaiyo_ja.pdf）

③『禁裏・公家文庫研究』第五輯（思文閣出版 二〇一五年三月）の研究代表者による「あとがき」

④田島公編『日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——』（二〇二二―一四（平成二四―二六）年度研究成果報告書（中間報告）』（東京大学史料編纂所 二〇一五年三月）

⑤同編『日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——』（二〇二二―一六（平成二四―二八）年度研究成果報告書（最終報告書）』（東京大学史料編纂所 二〇一七年三月）

などに詳しい。簡単にその目的を再説すれば、これまでに集積した禁裏・公家文庫のデジタル画像約一〇〇万コマの公開とデジタル画像集積の継続、古典学研究支援ツールの充実、禁裏・公家文庫の文庫史・蔵書目録・収蔵史料の目録学研究の進展、学界への情報提供や、古典学の市民向け公開講座の実施等を通じて、古典学再生の研究基盤・研究環境を整えることである。

本研究プロジェクトの研究成果に対する日本学術振興会の「評価」としては、二〇一五年度研究進捗評価（評価結果）が日本学術振興会のHPに以下のように公開されている (https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-24222001/24222001_kenkyu_shinchoku_hyoka_keka_ja.pdf)。

【平成二七年度 研究進捗評価結果】

評価 評価基準

A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる

（意見等）

本研究は二つの課題に向けて行われてきているが、その一つである日本古典学の支援ツールの面では、多くの機関と連携して所期の成果を上げているばかりか、予想以上の成果が上がっており高く評価できる。特に、禁裏文庫や近衛家文庫などとの連携により、その全貌が明らかにされつつあることは、研究者に大きな夢を与えている。

もう一つの目録学の基礎確立については、個々の研究においては優れているものの、総体の展望を示すような研究への取組が更に求められる。目録学が学問史、文化史、知の体系史を考える上で極めて重要な学問であることを示すような研究の進展と、そのことを広く訴える機会を設けることが望まれる。

評価及び意見は以上のとおりであるが、近刊の『科研費ニュース』二〇一六年度第四号（日本学術振興会 二〇一七年三月）の「最近の研究成果トピックス」欄に、田島公「禁裏文庫の調査・公開・研究の画期的な進展と、公卿学の再検討」(https://www.jpds.go.jp/j-grants/aid/22_letter/data/news_2016_vol4/p04.pdf)を掲載させていただいた。これは、日本学術振興会学術システム研究センターにおいて、最近の学会等での顕著な研究成果の中から選定され、『禁裏文庫の調査・公開・研究の画期的な進展と、あわせて公卿学の系譜の再検討』（人文・社会系）という研究成果に対して、「本年度で五年間の研究が一応終了し、左記の成果を出しつつ古代中世史研究の史料状況を大きく改善した。」という理由で執筆を依頼されたものである（二〇一六年二月一六日付け学術振興会研究事業部研究事業課長名で研究代表者への依頼書）。

本研究プロジェクトの最大の成果は、右記の『科研費ニュース』に記したように、宮内庁侍従職管理の京都御所東山御文庫所蔵禁裏本と公益財団法人陽明文庫所蔵近衛家伝来本のメタデータ付のデジタル画像を国内で初めて（それは同時に世界で初めてでもあるが）公開したことである。東京大学史料編纂所閲覧室の情報端末データベース（Hi-CAT Plus：「東京大学史料編纂所蔵史料目録データベース」改良版）で公開した画像数は、東山御文庫本が約二六万五千コマ、陽明文庫本が約四万八千コマである。また、本科研期間中にはそれらに加え、宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本・桂宮家旧蔵桂宮日記・九条家本・柳原家本・三条西家本・壬生家本（函号F9）・白川家旧蔵白川家日記・平田家本・続群書類従、宮内庁正倉院事務所所蔵「東南院文書」、西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本、山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本など、学術創成研究費及び本科研費で蒐集した禁裏・公家文庫収蔵史料のデジタル画像を、史料所蔵機関の公開許可を得て、閲覧可能な環境に整え、東京大学史料編纂所閲覧室の端末データベースHi-CAT Plusから合計約九六万六千七十六コマを公開し（前述の東山御文庫本・陽明文庫本も含む）、目標としていた約一〇〇万コマという目標をほぼ達成することができた。

しかしながら、今日、デジタル画像の「公開」というと、インターネットでの公開が主流となってきた現状に鑑み、（Ⅰ）一九九八～二〇〇〇（平成一〇～一二）年度科学研究費・基盤研究（A）「東山御文庫を中心とした禁裏本および禁裏文庫の総合的研究」（研究課題番号…一〇三〇一〇一五）・（Ⅱ）二〇〇二～〇五（平成一四～一七）年度科学研究費・基盤研究（A）「禁裏・宮家・公家文庫収蔵古典籍のデジタル化

による目録学的研究」(研究課題番号:一四二〇一〇三三)・(Ⅲ)二〇〇七～一一(平成一九～二二)年度科学研究費・学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生——天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明——」(研究課題番号:一九GS〇一〇二)、そして前述の(Ⅳ)「日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——」、という田島が研究代表者を務めた四回一七年度の禁裏・公家文庫に関する大型科学研究費による研究プロジェクトの集大成を目指して、昨年一月に、二〇一七(平成二九)年度～二〇二二年度の五年間の予定で、これらの科研の成果を継承する、基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展——知の体系の構造伝来の解明」(Advancing Japanese Bibliographics and Improving the Accessibility of Documents Held by Royal and Aristocratic Archives — Clarifying the Structure and Transmission of Knowledge Systems)を申請した。その結果、本年四月二七日のヒヤリング審査を経て、五月三一日に、幸いにも採択された旨、内定の連絡をいただいた(研究課題番号:一七H〇六一七)。

これは、学術創成研究費の採択による重複採択ということで、辞退した二〇〇七年度科学研究費・基盤研究(S)「古典学再生のための目録学の構築——禁裏・公家文庫の原形態復原の研究——」(研究課題番号:一九一〇一〇〇三)も含めると(日本学術振興会HP: <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19102003>)、実質、三回連続の基盤研究(S)の採択であり、それ以前の一九九八年度からの二回の基盤研究(A)や、基盤研究(S)の二～三倍の金額となる学術創成研究費を継承した二度目の基盤研究(S)の採択も含め、人文社会系では屈指

の大型科研費による研究プロジェクトと言え(なお、一九九八年度には基盤研究(S)はなく、基盤研究(A)が最も大きな科研費であった)、本研究プロジェクトに対する研究者の期待が非常に大きいことがうかがえ、私自身、研究代表者としては最後的大型科研費となると思うと、再度身が引き締まる思いである。

さて、この度新しく採択された研究プロジェクト計画に関しては、近々公開される日本学術振興会のHP (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-17H06117>)を参照されたいが、研究目的を簡単に述べれば、(1)従来の東京大学史料編纂所の所内限定の閲覧システムであるHi-Cat Plusをウェブ公開可能なシステムに改良し、宮内庁書陵部所蔵の禁裏(天皇家)・公家収蔵家分け史料(伏見宮家本・九条家本等)約一〇〇万画像をウェブ公開する。(2)宮内庁所蔵『東山御文庫目録』のデータベース化や同目録と近世禁裏文庫蔵書目録との対応関係の解明、東山御文庫本デジタル画像と『京都御所東山御文庫記録』との画像リンク作成等を行い、また京都御所・同離宮所蔵の学術関係史料の高度利用化も促進する。さらに「東南院文書」・陽明文庫本の地元での画像公開の準備を支援する。(3)禁裏・公家の各家文庫収蔵史料の特徴や創始・伝来・再興等に関わった人物、蔵書目録、各文庫間の写本の貸借関係、研究論文等の情報を集成し、禁裏・公家の文庫ごとの研究を体系化し、「日本目録学」の総体を提示しながら、禁裏・公家文庫に集積された前近代の「知」の体系の構造と伝来過程を通時的・共時的に解明する。(4)古典学振興のために、「日本目録学」を応用したデータベース作成、宮内公文書館管轄「特定歴史公文書」内の学術資料(各種実録他)のデータベース化・研究

支援ツール等の作成を行い、研究者・市民向け公開講座を継続して開催する。なお、本シリーズ『禁裏・公家文庫研究』の第七輯以降は、

新規採択の基盤研究(S)の研究成果が掲載されることを予告し、五年間の研究期間内に第八輯までの二冊は刊行を目指したいと思う。

さて、前置きが長くなってしまったが、本書第六輯は、右記科学研究費・基盤研究(S)の五年間の研究成果をまとめたものであり、以下にその内容を簡単に紹介する。

通常、第一部は、禁裏・公家文庫全体の研究、その蔵書目録を用いた目録学的研究論文を収載するが、今回は都合によりそのような論文を収載出来なかった。それに相当する内容の論文として、拙稿「文庫論」、『岩波講座 日本歴史』二二(岩波書店 二〇一六年二月)があり、現時点では、時間の関係もありそれ以上のものを載せることが出来なかったため、岩波講座論文を読みやすくなるよう、第一章のタイトルを変更し、章を二つの節に分割して新たに節のタイトルを付したほか、全体に誤植や体裁の不統一の訂正など最低限の訂正と紙幅の関係で割愛した註の参考文献を復活させ、「文庫論——前近代の古典籍の伝来・知識体系継承の歴史的特質と文庫の役割——」とサブタイトルを付した論文を、前掲⑤の科研最終報告書に収載したので、こちらをお読みいただきたい。

こうした事情により、本書第一部には、これまでは第二部に収めていた禁裏・公家文庫収蔵史料を用いた論考を収録した。

先ず、藤井讓治「前久が手にした関ヶ原情報」は、『陽明叢書』書状篇のための原本調査の成果のうち、二〇一六年二月二〇日の「陽明文庫講座」での講演内容をもとに書き改められたものである。従来、

写本の形でしか知られていなかった所謂、関ヶ原の戦いに関わる、陽明文庫所蔵の(慶長五年(二六〇〇))九月二十日付「(近衛信尹宛)近衛前久書状」の原本を紹介・検討することを通じて、「関ヶ原合戦」直後の情報の一つのあり方やその正確さを既知の他の史料と逐一突き合わせて確認し、その上で、この書状に記されている「青野力原ニテノ合戦」と、いわゆる「関ヶ原合戦」という呼称との関係を、一次史料を軸に検討したものである。今日、人口に膾炙する天下分け目の関ヶ原の戦いという表現が、合戦直後では行われていなかった可能性が浮上したことにより、合戦直後から「関ヶ原合戦」という表記がなされた史料の信憑性にまで波及する興味深い論考である。

本シリーズ第一輯所収の田島「尊経閣文庫本『無題号記録』と東山御文庫本『叙位記 中外記』所引「院御書」——『院御書』の基礎的研究1——」で、尊経閣文庫所蔵「無題号記録」が後三条天皇撰『院御書』の一部(男叙位の最後、女叙位、除目の前半部分)であることを指摘した後、尊経閣文庫所蔵「無題号記録」の解題を執筆させていただく機会を得たが(拙稿「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』解説」 前田育徳会尊経閣文庫編『無題号記録・春玉秘抄』 尊経閣善本影印集成 第四九輯 八木書店 二〇一一年)、その際に「無題号記録」の書写年代に関しては、原本を見た印象として、尊経閣文庫が示す書写年代である鎌倉後期よりも古く、院政期(一二世紀)まで遡るのではないかと感じた記憶があるが、書風に関して全く知識が乏しく、根拠を示せなかったため、尊経閣文庫の見解をそのまま採用した。恵美千鶴子「尊経閣文庫所蔵『無題号記録』の書写年代について——高野切第三種筆跡との比較より——」は、「無題号記録」と「高野切」第三種筆跡との書

風の比較から、「無題号記録」は一〇八〇〜九〇年代に書写されたと推測する。さらに後三条天皇または天皇に近い高貴な人物からの命令により、天皇の没後、程なくして、しかるべき能書が書写したと推定するものである。今後、書道研究者により議論が深まることを期待したいが、これは大変重要な指摘である。私は「無題号記録」解題執筆の最終段階で、明治大学図書館所蔵三条西家本『除秘鈔』一卷（天文九年〔一五四〇〕、三条西公条写）が、後三条天皇撰『院御書』の除目部分であることを確認し、内題に「除秘鈔 （源） 称有仁公抄、或称俊明卿抄。」とあり、建久三年（一一九二）の本奥書に「有仁公次第云々。或云、俊明卿次第云々、」とあることから（田島公「三条西家旧蔵『除秘鈔』について〔本文篇〕」『東京大学史料編纂所報』四七号 二〇一二年一〇月）、皇孫の源有仁または源俊明を経て伝えられた『院御書』の写本が存在すると想定したが、そのことともかわる大変重要な見解である。この問題に関しては、恵美論文の成果を検証しつつ、末柄豊氏と共に執筆・刊行予定の三条西家本『除秘鈔』の報告書に収録予定の拙稿を参照されたい。

神戸航介「宮内庁書陵部所蔵九条家本『諸次第等目録』について——平安時代儀式研究のために——」は、同名の目録を検討し、目録に記されている儀式書を現状の九条家本の中から比定し、近世初期の九条道房撰『九条家記録文書目録』に欠けている箱または番外の箱の目録で、官奏・列見・定考・賭弓などの儀式書が入ったものであることを示した後、目録記載の折本状の次第書に注目し、原本調査を踏まえ、懐中次第であるとする。さらに鎌倉期の「大粮申文次第」の検討から、撰関期の大粮申文の儀式の復元も行う。私が担当している人文

社会系研究科の演習の中で、史料編纂所閲覧室の端末データベースHi-CAT Plusを利用することに馴染める目的から九条道房撰『九条家記録文書目録』記載の箱別の書目同定作業の一部を行い始めたことから発展させ、サブタイトルにあるように、平安時代の政務儀式や財政研究にまで視野に入れた研究であり、蔵書目録を活用した通時的・共時的な目録学研究の手法になる研究といえよう。

陽明文庫所蔵『勘例』七卷（「近衛家記録十五函文書」十三函十六号〔二十一号、十四函八十三号〕）は、撰関・院政期〜鎌倉期を中心に八世紀から十四世紀までの年紀の史料を収載するが、全文翻刻による公開が俟たれている。最終的には十四世紀後半に編集された政務の先例集となっており、その前段として十三世紀前半の局務中原氏・官務小槻氏らによって作成された勘文・請文などがあるが、その構造や編集過程はいまだ十分に解明されていない。そうした学界からの期待に因應べく、来年度、大日本古記録の一冊として上巻（十三函十六号〜十八号、十四函八十三号を所収予定）の刊行を目指し、準備をしている。

黒須友里江「陽明文庫所蔵『勘例』十三函十八号における先例記事の特徴」は、氏にIV基盤研究（S）のRA（リサーチ・アシスタント）の研究業務として『勘例』の下原稿作成を担ってもらった研究の一端をまとめたもので、特に十三函十八号を取り上げ、引用される先例記事の出典を丹念に調べ、出典が判明した記事を分析した結果、殆どの場合、何らかの形でもとの記事が省略・改変されていることを指摘し、利用に際しての注意を促す。また、類似する内容の勘例がある史料を検討し、『勘例』と共通する材料の存在を想定する。そして、それらの特徴から、外記による先例引勘作業に関して、必ずしも原典に当たった

のではなく、先例を集積・部類した「雑例」のようなものを用いて『勘例』を作成したのではないかと結論付ける。十三函十八号を対象とした分析であるが、今後、このような先例を示す個々の記事の出典や関連史料を全ての『勘例』にわたり丹念に確認する作業の重要性を示唆すると共に、記事を利用する際の注意点を喚起している。

第二部は、禁裏・公家文庫収蔵史料の翻刻・紹介を中心にしたものを受録した。

先ず尾上陽介「大日本古記録未収の『猪隈関白記』原本・古写本」は表題の通り、近衛家実の日記である『猪隈関白記』は大日本古記録として岩波書店から一・六巻（一九七四・八三年）が刊行されているが、その後、前記大型科研費による陽明文庫での調査やデジタル撮影により判明した大日本古記録未収の一八断簡を、原本・古写本から翻刻・紹介する。これにより、現存する『猪隈関白記』が断簡も含め、全て紹介・翻刻された。

田島公「陽明文庫所蔵『藤原師実執筆除目尻付関係史料』三点の紹介」は、陽明文庫所蔵で藤原師実が執筆を担当した康平四年（一〇六一）から承保二年（一〇七五）までの除目の尻付に関する史料三点を翻刻・紹介する。『大日本史料』二編の未刊行部分の史料で、全体の紹介は初めてである。これら尻付関係史料を『大間成文抄』などと組み合わせるにより、任官した人物が判明し、除目の復原が可能となるので、康平年間から承保年間にかけて、そうした作業を行ったが、表が大きくなってしまったため、紙幅の都合で省略せざるを得なかった。紙背文書も含め、別の機会に公表したいと思う。

藤原重雄「宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』六「御読

経」・七「御願供養」は、表題の部類記の紹介・翻刻である。著者の藤原重雄氏は、本シリーズの第二輯から第五輯にかけて藤原定能の日記『定能卿記』（『心記』とも）の紹介を継続中で、九条家本『定能卿記部類』については、これまでに、第四輯に八「興福寺供養」、第五輯に九「仏事」を全文翻刻している。本輯では、恒例の季御読経と臨時の大般若御読経などを収める六「御読経」と、院・諸家による堂供養の記事を部類する七「御願供養」との二軸を掲載する。記事は承安三年（一一七三）から建久七年（一一九六）にわたり、特に後者（七）には、後白河院・建春門院（平滋子）による御願寺堂塔の供養に加え、御室仏事として守覚法親王の仏事、諸家堂供養として平時子の西八条第の堂供養と藤原師長の妙音堂供養の記事など、文化史的に興味深いものが含まれている。

大和長谷寺の創建縁起の一つである『長谷寺縁起文』を用いた論文は非常に多いが、田島公「陽明文庫所蔵『長谷寺縁起文』の解題と翻刻——鎌倉長谷寺本との比較検討を中心に——」はこれまで殆ど利用されてこなかった南北期書写と思しき陽明文庫本の紹介・翻刻である。ほぼ解題と二色刷りの翻刻を終えてから、近年紹介され、本書と密接に関連すると思われる嘉慶二年（一三八八）の書写奥書がある鎌倉長谷寺所蔵本の紹介・翻刻があることに気づき、急遽、比較検討と原本調査を行ったため、本輯刊行遅延の最大の原因となってしまったこととお詫びしなければならないが、鎌倉長谷寺所蔵本の二条良基による識語や陽明文庫本の行慶による識語から、二つの南北朝期の写本が興福寺伝来の写本を書写し、二条良基の訓点を伝える重要な写本であることを指摘する。

遠藤珠紀「『院中御湯殿上日記』(天正一五年八月～十二月記)の紹介」は、未翻刻であった『院中御湯殿上日記』の紹介である。東京大学史料編纂所所蔵『院中御湯殿上日記』は正親町上皇の院御所で記された女官による業務日記で、院中のものとしては最古という。天正一五年(一五八七)から一十九年までの五年分がほぼ通年で残されており、同時期には後陽成天皇の『御湯殿上日記』も残されているが、こちらは簡略な記載が多く、欠失部分もある。本記はそれと補完し合うものとなり、殊に天正一五年の『御湯殿上日記』は九月六日以降が欠けており、この間の宮中の情勢を窺うには、本記が重要になるという。政治的な記述も注目されるが、当該期には、室町期に中絶した種々の朝儀の復興が行われており、また後陽成天皇は好学の天皇として知られ、豊臣秀次もさまざまな書物の書写・集積を行っているが、本記中にも院・天皇らの文化活動、書物の貸借、書写に関する記事が見られる。これらの記述を丹念に拾うことで、禁裏文庫の復元に資するところがあると思われる。なお、遠藤論文は「『院中御湯殿上日記』(天正一五年正月～三月記)の紹介」「中間成果報告書 日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——」(二〇一五年三月)・「『院中御湯殿上日記』(天正一五年四月～七月記)の紹介」『東京大学史料編纂所研究成果報告書 室町後期・織豊期古記録の史料学的研究による政治・制度史再構築の試み』(二〇一六年九月)での翻刻に続く第三弾で、『最終報告書 日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充——天皇家・公家文庫を中心に——』(二〇一七年三月)所収の金子拓・遠藤珠紀「正親町天皇の遺勅 東山御文庫所蔵史料勅封一〇一函——一七「正親町天皇覚書類」の紹介」と関連

する。

第三部には、禁裏・公家文庫の家分けの蔵書目録を収録したが、本輯には、小倉慈司編「宮内庁書陵部所蔵御所本目録(稿)」を掲載した。御所本の復原は、宮内庁書陵部編・刊『和漢図書分類目録』(一九五二・五三年)に一九五一年三月末現在の蔵書が見え、「凡例」にあるように、同目録に「御」と記されたものが「御所本」であると記されており、これらを再編集することが基本的な作業となるが、小倉氏は目録の情報の上に依らず、宮内庁書陵部図書寮文庫本を再調査し、これまで「御所本」とされてこなかった図書も含めた、禁裏伝来本を復元した目録を作成された。「御所本」とは、小倉氏による「凡例」の冒頭に記されているように、近世禁裏伝来本のみならず、「かつて御物であった書物」も指すとも考えられるので、それらも収録している。いつもながら綿密な小倉氏の労作である目録の公開により、今後、「御所本」の復原研究が進展すると思われる。

さて、本書の序文は関西大学文学部教授の西本昌弘氏にお願いした。西本氏は、宮内庁書陵部在職中などに行った京都御所東山御文庫の調査の成果として、藤原行成撰『新撰年中行事』・『日中行事』等、佚書と思われるいた「幻の書」を、外題が変わった近世前期の写本の中から確認し、蘇らせ、平安時代の研究に新たな希望の光をあて、平安期の儀式書研究を牽引する研究者である。本書のシリーズでも、第一輯・第三輯に論文をお寄せいただいている。一九九九年四月より、蘭田香融先生の後任として関西大学に赴任され、禁裏・公家文庫収蔵史料を用いた奈良・平安期の研究を進め、宮内庁書陵部で学んだ学問を関西の地で花開かせ、研究者の養成も行われている。ご多忙のところ、

序文をお寄せいただいた西本氏に感謝申し上げます。

ところで、誠に残念なことであるが、Ⅲ学術創成研究とⅣ基盤研究(S)の連携研究者であった東京大学名誉教授の三角洋一氏が二〇一六年五月四日に逝去された。三角先生には科研の研究会には殆どご出席いただくと共に、『禁裏・公家文庫研究』第四輯(二〇一二年三月)に『言談抄』の三伝本の関係」というご論考を寄稿していただいた。執筆に至る経緯は拙稿「あとがき——学術創成研究の成果と古典学再生への道程——」に略述させていただいたので繰り返さないが、ごく短い期間にも関わらず、『言談抄』の本格的な写本に関する論文を書いていただいた。三角先生のご業績に関しては、東京大学国文学研究室編『三角洋一先生略年譜・業績目録』(『国語と国文学』九四巻三号 二〇一七年三月)に詳しい。また、科研メンバーではないが、二〇一五年七月一日に元尊経閣文庫常務理事の橋本義彦氏が亡くなられた。橋本先生には第一輯(二〇〇三年二月)の巻頭に「序——東山御文庫と書陵部——」をご執筆いただいた。私が、一九九八年度からⅠ基盤研究(A)を開始し、近世の新写本である東山御文庫本の研究を始めた一つの大きなきっかけとなったのは、橋本氏から伺った「古写本必ずしも善本ならず」という教えであった。なお、橋本先生のご業績に関しては、橋本義彦先生を偲ぶ会編・刊『橋本義彦先生を偲ぶ——略歴・業績目録——』(二〇一六年七月)に詳しい。さらに私が大学院時代に中国目錄学の授業を拝聴した竺沙雅章京都大学名誉教授が、二〇一五年一〇月二日に逝去された。私は大学院時代、竺沙先生による目錄学の講義を拝聴したが、私の日本目錄学の構築という発想は、先生の講義の賜物である。竺沙先生からは、『禁裏・公家文庫研究』や科研の

報告書をお送りすると必ず、お葉書かお手紙を下さり、的確な意見を賜った。竺沙先生のご業績に関しては、吉本道雅「竺沙雅章先生の訃」(『東方学』一三一輯 二〇一六年一月)がある。お三方の先生のご冥福をお祈りしたい。

最後に、本年八月末で退職される粕谷真里子氏についても触れておきたい。五年間、助手として勤務した共立女子大学から、山本聡美先生(Ⅳ基盤研究(S)の研究分担者)の紹介で粕谷氏を、Ⅲ学術創成研究費の科研事務の担当の一人として二〇一一年四月に学術支援職員として迎えたが、粕谷さんは、Ⅳ二〇一二年度からの基盤研究(S)そしてⅤ二〇一七年度新規採択の基盤研究(S)という、人文系では最大級の大規模な科学研究費に三度かわり、Ⅲ・Ⅳの日本学術振興会への様々な報告書(進捗調査報告書・終了報告書など)、Ⅳ・Ⅴの申請書の作成、冒頭で述べた③・④の中間・最終報告書三冊の編集・刊行(特に④期間中に刊行した二冊の報告書、さらに科研費主催「陽明文庫講座」など市民向け公開講座の準備・当日の運営は、粕谷さんの存在なくしてはその円滑な遂行はなしえなかった。研究代表者として深く感謝の意を表したい。

本書の編集に関しては、思文閣出版新刊編集部の大地亜希子さんに大変お世話になった。辛抱強く原稿をお待ちいただくとともに、逐一、史料を確認していただき、思わぬ間違いを訂正することができた。記して感謝申し上げます。

(田島 公)

執筆者一覧（掲載順）

編者

田 島 公（たじま・いさお）

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(国史学専攻)二年中途退学。東京大学史料編纂所教授。

* * * * *

西 本 昌 弘（にしもと・まさひろ）

1955年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。関西大学文学部教授。

藤 井 讓 治（ふじい・じょうじ）

1947年生。京都大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士(文学)。京都大学名誉教授。

恵美千鶴子（えみ・ちづこ）

1969年生。千葉大学大学院文学研究科(修士課程)人文科学専攻。東京国立博物館主任研究員。

神 戸 航 介（かんべ・こうすけ）

1988年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。

黒須友里江（くろす・ゆりえ）

1987年生。東京大学大学院人文社会系研究科(日本史学)博士課程単位取得退学。東京大学史料編纂所助教。

尾 上 陽 介（おのえ・ようすけ）

1963年生。早稲田大学大学院文学研究科史学(日本史)専攻博士後期課程二年退学。東京大学史料編纂所教授。

藤 原 重 雄（ふじわら・しげお）

1971年生。東京大学大学院人文社会系研究科(日本史学)博士課程単位取得退学。東京大学史料編纂所准教授。

遠 藤 珠 紀（えんどう・たまき）

1977年生。東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学。東京大学史料編纂所助教。

小 倉 慈 司（おぐら・しげじ）

1967年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学(日本文化研究専攻)。国立歴史民俗博物館准教授。

きんり くげぶん こけんきゅう
禁裏・公家文庫研究 第六輯

2017(平成29)年8月31日発行

編者

田島 公

発行者

田中 大

発行所

株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355 電話 075(533)6860(代)

定価：本体15,000円(税別)

印刷・製本 株式会社 図書印刷 同朋舎

© Printed in Japan, 2017

ISBN978-4-7842-1890-5 C3321